

巻頭言

愛知県立心身障害児療育センター第二青い鳥学園

富田 秀仁

ジュビロ磐田，EBM と研究，そして臨床

唐突で申し訳ありませんが、僕はジュビロ磐田というサッカーチームが大好きです。できる限り試合に参戦します。仕事でそれが無理ならば、その日のうちに必ずビデオ観戦します。勝った後はかなりご機嫌、負ければ落ち込みまくり。もはや生活の一部です。でもふと我に返り、なぜこんなにも好きなのかを突き詰めて考えてみると、これがよく分かりません。考えれば考えるほど、結局答えは「理由なんてない、だって好きなんだもん！」になってしまいます。

ただこれはサッカーだからよいのであって、理学療法ではだめなのです。筋力トレーニングをなぜするのかを考えた場合に、「理由なんてない、だってしたいから！」では問題です。なぜその治療を行うのかに対して明確な根拠がなければなりません。そう EBM です。どの教科書を見ても書いてあります。EBM がとても大事だと。でも、根拠と思っていることも実はこじつけじゃないかと問われて、本当に「違う！」って答えられるのでしょうか。僕は自信がありません。

僕は14年前に愛知県立心身障害児療育センター第二青い鳥学園で理学療法士として働き始めました。現在と同じ所属ですが、ずっと働いていたわけではありません。5年で退職し、大学院の博士課程に入りました。修了した後は、豊橋創造大学で教員をしていました。大好きな臨床を離れてまで研究の道に足を踏み入れたのは、臨床で感じる多くの疑問を自ら解決できるようになりたいとの思いからでした。

大学院に行き、その後大学に勤めたことで、確かに研究ができるようになりました。論文も書けるようになりました。しかし、本当に良かったと思えることは、研究が持つ可能性とともにその限界を実感できたことです。研究はある枠組みの中でしか行うことができません。被験者のリクルートにおける制約であったり、測定装置の制約であったり、分析手法の制約であったり。色々なものに制約された上での結果でしかありません。EBMの根幹はそんな不安定なものだと思っています。

この4月から再び臨床に戻ってきました。同じような患者さまは一人としていないということを改めて強く感じます。そんな患者さま一人ひとりに根拠のある理学療法は本当にできるのでしょうか。正直分かりません。「その根拠、本当はこじつけじゃない？」これは自分自身に日々問いかけている言葉です。少しでも「こじつけじゃない！」と言えるように、臨床に研究にもがいていきたいと思います。「あきらめたらそこで試合終了ですよ…？」この名言を胸に。